知らない原作で人生を

とろろ～

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人を助けた俺氏こと綱島エンジは神の手により次の人生を歩むことに。

しかし次の人生は、人が生んだ作品の中で。

どんな作品に行きたいか要望は出しても考慮されるのみで、歩むための作品は無作為に選ばれる。

知らない作品で綱島エンジはどんな人生を歩むのか。

※原作ブレイクの可能性が多々あります。多分。苦手な方はバックしてください。

目　次

1話　プロローグ ―――――――――――――――― 1
2話　原作開始・・・なのかが分からない ―――――――― 7
3話　この世界で初めてメイドさんに会う。 ―――――――― 14

1話　プロローグ

・・・・・・・ここは？どこだ？
見渡すと様々な色の炎が漂う不思議な場所にいた。
あれ？俺ってば・・・死んだ・・・よね？
そう、あれは確かに体感的には５分前のこと。

今日も良い天気だと思い、町を歩いていた。

「いや～今回のガンプラも最高の出来ですなぁエンジ氏。」
「ですなぁキヨヒコ氏。俺氏も中々に神ってる出来だと思ってますわぁ。」

自分で作ったガンプラを持ち寄り、友人と話をする俺氏こと綱島エンジ。
そう、俺はオタクである。オタクといっても本当のオタクの皆さんには申し訳ない程度のオタクである。というのも俺氏がオタクの世界に脚を突っ込んだのは最近であり、まだガンダムと友人に紹介された近年のアニメしか見ていないのだ。
ちなみにド嵌まりした原因は昨今のガンダムである『漢気溢れまくるガンダム』な作品である。
「そう言えば、どうでしたかな？この前貸し出した作品は？」
「ゲートですな？かなり見ごたえありましたよ。あのようなファンタジーに現代兵器を合わせるとは恐れ入りました。楽しかったですよ。」
「それは良かった。あれは所謂『異世界もの』の部類に入るのですが、それが流行る原因となったとされる作品がありましてな・・名前はゼr・・と言って・・・アニメ版では主人公は秋葉・・・」
「なるほど。わからん。ツンデレの神？武器が喋る？」
キヨヒコ氏は、どんどん話をするものの話が頭に入ってこない。分

からない言葉が飛んできすぎる。

という話をしていると、ビルの屋上に人影を見つけた。
「っ?!ちょっと、待ってキヨヒコ氏。あれって・・・」
「おい！君！止めたまえ！」
「来ないで！じゃないとっ！今すぐ飛びまっ?!」
突然の強風に身体を揺らし、落ちる人影。
・・・何故だろうか。ほっとけば良いものの、身体は勝手に動いてしまい・・・結果、俺氏受け止めるも、ほぼ下敷き状態。せめて受け止めた人影だったものが結構な美少女だったのが救いだったかも知れない。

「エンジ氏！エンジ氏!!き、救急車を早く誰か呼んでくだされ!!」
キヨヒコ氏の声が聞こえる。でも・・・ああ・・めちゃくちゃ痛いんだ。死にそうなくらい痛いんだ・・・意識も遠くなっていく。
・・・そうだ・・・これを言ってみたかったんだ・・・・
「俺は……止まんねぇからよ……だからよ、止まるんじゃねぇぞ……」
「ちょっ?!それ色々と省略しすぎ！それに完全に死ぬ時に言うセリフですぞ！死ぬ気で生きてくだされ！エンジ氏!!エンジ氏ーー!!」
・・・死ぬ気で生きろとか・・・無理を言わんでください・・・キヨヒコ氏・・・

ということがあったのだが・・・あれ～？
『レディース！エンド！ジェントルマン！』
うおぅ?!
突然、声が頭に響いた。
『私は神である！数多く存在する神の一人である。』
・・・ああ、はい。日本の神は八百万いますもんね。
『皆は死んだ！ここは魂の一時預り場所である！本来、魂は必ず罪の

一つは犯しており必ず地獄は通るものである！しかしながら諸君らは一考の余地があるとされたものである！何故なら諸君らは自己犠牲がもとで死んだものだからである！自己犠牲とは人の世で最も気高いと我らの世界ではなっている。しかし！天国に行くまでに聖人ではなかった！従って一考となったのだ！』

はあ、なるほど。

『そこで！そなたらに！もう一度人生を与える！』

・・・マジでか?!

周りを見れば、漂う炎も一瞬驚いたような反応を示したように見える。

『ただし！人の世に返すことは出来ぬ！』

え?

『魂とは！天国で！地獄で！行いを！清算する！つまり記憶を消す！しかし一考のために天国も地獄も行かぬ！記憶はそのままである！そのような状態で人の世に出しては混乱を招くであろう！』

まあ、そうか???

『従って！そなたらには作品の中で人生を送ってもらう。』

はあ。なるほど。・・・え?

疑問に思うと同時に周りが光だした。そして光が収まりとそこには大量の本棚が現れた。

『人とは面白いものだ。数々の話を生み出す。それは人が生まれてから生み出した作品が並んでおる。』

見れば部屋というより空間全体に本棚がびっしりと並んでいた。

『これより！ある程度の願いは聞き入れる！日本の作品を選びたければ日本と言えば良い！事の始まりがアメリカならアメリカと言えば良い！その旨を伝えよ！ただし！作品の指定は出来ぬ！伝えられた旨を聞き、近い世界観から選び、そこからは我らが無作為に選択する！そして作品一つに入れる魂は一つのみ！』

っ?!　じゃあ早いもん勝ちか?!

『しかし早い者勝ちと思い、急いても意味は無いぞ。人の世に作品は億以上。似かよる物など当然ある。そして何より！狙った世界に

行ったとて！その世界の主人公に必ず会えると思ったら大間違いである！』
はい？
『作品に送りとて、作品の中では一つの世界が成り立っておる！主人公とて一人の人間！行動が作品に沿うとて、そなたらが必ず関われるもので無し！しかも赤子から始めてもらうゆえ、さらに会える可能性は少ないぞ！世界は広いからな！一応、サービスで年齢は主人公と同じ年齢になっておる！』
つまり・・・主人公には主人公の人生があり、俺には俺の人生が・・・暮らしがあるってことか。
つまり作品にはいるけど、人生の選択次第でモブになるのか。
『というわけだ。さて、我は質問は受け付けぬ！では、今より其々に担当の鬼を付ける！そやつらに旨を伝えよ！では、皆のもの！良い人生を送れよ！』
・・・ええ、マジかぁ。

神の声が消えると、同時に目の前に突然スーツを着ている鬼が現れた。
うぉぅ、ビックリしたぁ。
「では、どうぞ。条件を言ってくださいませ。」
わお。何て事務の似合う鬼。えっと、質問がありますが良いですか？
「何でしょう？」
あ、鬼さんは答えてくれるんだ。良かった。
木星とか火星とかで始まるのでも良いですか？
「可能ですよ。」
やった！じゃあ２０００年代の作品で火星とかで始まる感じの
「本当によろしいのですか？」
・・・はい？
「作品によっては他星間で始まるものとしては危険な事柄が多く、生

まれて直ぐに即死亡となるケースも有りますが、それでも良いですか？」
・・・ですね。しまったどうしよう。もし仮に狙い通りに漢気溢れる世界観で悪魔なんて呼ばれる『ガンダム』が活躍する作品に行けたとて、赤ちゃんから生きて、原作が始まるまでに生き残れる自信がない。
・・・・え？あれ？どうしよう。
「あ、時間が」
えっ？時間制限あるの？
「はい。ありますよ。そろそろです。」
ちょっ！早く言ってよ！
「はい。だから今言いました。」
ムッかぁ！どうしてくれよう。この鬼！
「早めにお願いします。」
くっ！思い出した作品は・・・ゲートのみ！あれならモブでもサブでも死なないはず！
じゃあ、日本の作品で！事が起こるのは秋葉原で！あと、作品年代は２０００年代！銃火器の使用有り！エルフとか出るやつ！
「わかりました。では、選びます。・・・・出ました。こちらですね。」
本は小さく、ラノベによくあるサイズのように見えるが・・・表紙は全体が黒く汚れており作品名が分からない。
えっと、作品名は？
「教えて知っていた場合・・・どうです？面白く生きれます？」
・・・生きれるよ！せめて危険は避けきれるよ！
鬼の言い分に少し切れてしまい、本に手をバンバンと叩きつけた。
「――あ」
え？
鬼の言葉に疑問を持った時には遅く、俺は本に手から吸い込まれた。
「いってらっしゃいませ～。」
あの魂の一時預り場所で最後に思ったのは・・・

あの鬼、次あったら絶対に泣かす!!
である。

2話　原作開始・・・なのかが分からない

時間って早いなぁ。
只今、秋葉原に修学旅行中である。
俺氏こと綱島エンジは現在17歳です。
まさか、生まれが北海道になるとは思わなかった。秋葉原めっちゃ遠いし、修学旅行でもない限りは関わりすらしない。
未だに自分が入った作品が分からず、そして一応ながらゲートの場合であっても良いように、色々な習い事をして身体も鍛えている。だって、よく考えたらゲートって秋葉原でめっちゃ人死んだよね？拐われもしたし。
一応さ、中学時代なんか
「ラブコメ小説かな？」
とか期待もした。だが特に何もなく普通に時は流れた。そりゃそうだ。ラブコメに銃火器の使用は無いよね。それにエルフが存在する異世界な地球でも無かったし。
ふう。とりあえずゲートって仮定して動こう。伊丹さんは33歳だった？よな。とりあえず今後やることは～高校卒業したら防衛大学に入って、それから・・・・
ドゴッ
「うわぁ！」
「おっふ?!」
強い衝撃を受けながら転がってしまった。
どうやら考え事をしながら歩いて人にぶつかったらしい。
起き上がると目の前に少年が倒れていた。
「いって～。」
「す、すまない。考え事をしながら歩いてぶつかってしまった。」
直ぐに歩みよって少年を起こそうと駆け寄って手を差しのべた。
「すまないじゃないよ。気をつけてくれよ。」
「本当にすまな・・・い・・・あれ？」
少年は俺の手を取るも、助け起こす素振りを見せない俺に訝しい目

を向けるも俺の様子がおかしい事で少年も周りを確認した。
「えっと、少年。ここどこ？」
「し、知らない。何か突然俺の目の前に光る裂け目見たいのが出たと思ったら、あんたにぶつかられて・・・って此処は完全に秋葉原じゃないぞ?!」
周りを見渡せば
石造りの城壁だろうか？高い壁があり同じく高い塔がある。
そして今いる場所は、ふかふかな芝生の上。
そして、マントをして明らかに日本人ではないピンクの髪の毛の美少女。その美少女と同じ格好をした少年少女が多数。あとハゲてる大人が一人。
明らかに普通ではない。どころか秋葉原でもない。
動揺して動けないでいると、ピンクの髪の美少女がハゲの大人と何やら口論している。完全に日本語ではないことが分かる。そして少しすると話がついたのか此方に少女が近づいて来た。
俺の近くまで来ると、何やらジェスチャーをしてきた。
「えっと、何？縮め？かな。ああ、中腰になれ。か？」
そういうことだと思い、中腰になると美少女は俺の顔を突然掴んで口と口を合わせてきた。
・・・美少女の唇・・めっちゃ柔らかい。・・・しかし混乱である。
「は？えっ？な、なんですと?!おまっ何てことやっ!!!身体が熱い！それに手がいってー!!!」
手の甲が焼けるように痛みが走る！
「いってーーー!!!」
声の方を向くと、ぶつかってしまった少年も同じように痛がっていた。
「な、なにを・・」
「お前・・な・・にを・・」
少年は文句を言おうとしたのだろうが途中で力が尽きたように倒れ、俺も意識が遠くなって倒れた。

ドゴーーン!!
「ふぁ?!」
突然の爆発音に驚いて目を開けると目の前に半裸で立ってる美少女と少し焦げて倒れてる少年がいた。
「な・・にごと?」
「あれ?言葉が分かる?沈黙の魔法だったのに。また失敗かぁ。」
何が失敗でこうなってるんだ?
「ねぇあんた、何か言いなさい。」
「あ~はい。俺の名前は綱島エンジ。」
「ツナシマエンジ?変な名前ね。」
「ああ、はい。えっと、それよりですね、俺~っていうか俺達って何で此処に居るんでしょうか?」
「決まってるでしょ。私が召喚したのよ。『使い魔』としてね。」
「使い魔ー?!」
「うぉっ!ビックリした。起きてたなら言えよ。」
「そんなことより使い魔って」
「いや、聞いての通りじゃね。よくゲームとかである使い魔のことだろ?」
「はあ?じゃあ此処は魔法でも使える異世界とでも言いたいのかよ!」
「・・・まあ、認めたくはないけどな。えっと、お嬢さん、此処は何て国ですか?」
「此処はハルケギニアのトリステイン王国よ。それにお嬢さん何て言わないで。私にはルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールっていう名前があるんだから。ああ、もう何で~。召喚したのが平民が二人なのよ~ドラゴ・・とか・・・・」
「ヤバいね。異世界だね。」
「かもな。聞いたことないぜ。」
「因みに少年の名前は?」

「平賀才人だ。」
「そうか。ヒラガサイトね。俺は綱島エンジ。よろしくな。エンジでいい。」
「見たところ俺と年の差は無さそうだから、俺もサイトでいいぜ。よろしくな。ところでさ、今なら逃げられるよな？」
　頭を抱えながらドラゴンやらピクシーやら呟いているお嬢さんを指差ししながら言っている。
「だな。ま～だぶつくさ言ってもんな。」
「なあ、早く行こうぜ。こんな新興宗教じみたとこ頭がおかしくなるぜ。」
「行きたいのは山々なんだけどさ。」
「じゃあ早く行こうぜ。」
「なあ、サイト。それより窓の外見てみ。」
「はあ？何かあるのか？」
「うん。決定的。」
　窓の外に何が見えるってんだよ。と言いながら外を見るサイト。そして少しして驚愕した。
「な、なんだよアレは?!」
「俺も驚いたよ。本当に。赤と青の月が見えるなんてな。」
　空には大きな月が二つあり、一つは赤く、もう一つは青く輝いていた。
「そんなバカな。異世界なんてアニメや小説の中だけだろ?!」
「うん。俺もそう思う。だから・・・お休みなさい。」
　俺は部屋の中にあるデカイベッドへダイブした。
「な、何してんだよ？」
「現実逃避だ。起きたら日本だ。きっと。」
「あ～なるほど。じゃあ俺も。」

「男と二人で寝るとか、あり得ないです。ワラんとこへどうぞ。」
「ず、ズルいぞ！俺もベッドがいい。」
「そうか。じゃあ、じゃんけんほい。」
「っ?!ほい！」

結果。俺、パー。サイト、グー。

「はい。お休みなさい。」
「くっそー!!」
「あ、あんた達！何を勝手に話してるのよ！ベッドは私が使うのよ！あんた達はワラの所で寝なさい！」
お嬢さんの言葉に、ニヤリとしながらサイトが此方を見る。
・・・ふふふ、サイトよ。甘いのぉ。甘々だよ。
こういう子はね、彼女の立場というものを刺激すれば楽勝ですのよ。

俺はベッドから降りて膝を着き、頭を垂れ言う。

「ルイズ様。」
「え？」
「麗しき、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール様。」
「へ？な、何よ。」
「私達は異世界から来ました。故に此方の世界の常識は分かりません。ですが、名前から察するに貴族の・・・しかも貴族の中でも階級は・・・かなりの上でいらっしゃる方と推察するのですが、どうでしょうか？」
「え？あ、はい。そうね。」
「やはり、そうでしたか。しかしながら！それならば！そのような御方が一（いち）使い魔がすることに気をたてるなど、してはなりません。どうか寛大な心をお持ち下さい。」

「そ、そうね。」
「そうですとも。平民と言えども使い魔などペットと同じ、とお思い下さい。」
「そうね。平民と言えども使い魔でペットと一緒よね。」
「はい。ですから一緒に寝ても問題ありません。使い魔はペットですので。」
「そうよね。ペットよね。」
「はい。さ、こちらへ。」
俺はベッドにルイズを促し、ベッドに寝かせ、俺は手を繋いでベッドの脇に待機する。
「あら、一緒に寝ないの？」
「はい。ルイズお嬢様がお眠りになられた後に入らせて頂きます。お嬢様がお眠りになられる前に寝る訳には参りませんので。」
「そう。よく出来たペットね。」
「ありがとうございます。では、お休みなさいませ。」
「ありがとう。えっと・・・ツナシマエンジ。」
「はい。良いお休みを。ルイズ様。」

その後、５分も待たずしてルイズから寝息が聞こえてきた。
ルイズは疲れてたのかな？いや～俺も疲れた。

と、このように楽勝です。
ドヤ顔でサイトを見てやろうと後ろを向くと、サイトがまるで埴輪のように口を開けて此方を見ていた。

「・・・何固まってんだサイト？」
「あ、お、お前何してんだ?!」
「しー!!デカい声を出すな！起きるだろうが！」
「す、スマン。って、いや、お前、完全に執事だったぞ。いい感じの。」
「全てはアニメ知識だ。アニメの執事。アニメ万歳。」
「え、え～？アニメ、スゲーな。」

「だろ。うむ。じゃあお休み。」

俺は、ゆっくりとベッド向かう。

「ああ。って、おい！本当にベッドに入る気かよ。」
「当たり前だ。俺は寒がりだからな。」
「お、女の子だぞ。」
「え、お前まさか、こういうロリっ子に欲情すんの？」
「し、しねーし！誰がこんな・・・」
「だったら問題ないな。因みに俺はするから。お休み。」
「あ、ああ。お休み。ってあれ？え？」

ルイズを起こさないように、ゆっくりとベッドに入り込む。

向こうでは、疑問の声を上げながら「・・・仕方ない」と言い、ガサガサと音を立てながらワラで寝るらしい。・・・正直スマンとは思ってる。

でも俺ってばワラでは寝れんのよ。申し訳ない。

さてと、異世界かぁ。どうしたもんか。完全にゲートじゃないし。恐らく原作には入ってるんだろうな。しかも多分だが平賀才人とルイズの話だよな～。

これからどうしたもんか・・・・・・・・・・・・うん、考えたけど無理。どうしようもない。寝よ。

その夜は疲れていたのか、それとも隣で「ママぁ」と寝言を言いながら寝る美少女に癒されたのか、それとも美少女の仄かに感じる香りに酔ったのか・・・とても深く眠った。

3話　この世界で初めてメイドさんに会う。

・・・・目を開けるとピンクの髪の美少女が目の前で無防備に寝ていた。

「やっぱ夢じゃなかったか。」

俺氏こと綱島エンジの朝は早い。身体を毎日鍛えるために朝のロードワークをするからである。

何故かって？だって何かしらの作品の中に住んでるんですよ。どうせなら関わりたいじゃないですか。その為の準備です。

特に鬼に出した要望なら『ゲート』という作品になる可能性が高かったはずなのだ・・・というか『ガンダム』以外に『ゲート』しか知らないのだが。

凄く簡単にゲートという作品を紹介しよう。

秋葉原で異世界に繋がる門が出て、自衛隊が色々する話である。

（省略しすぎ）

主人公は自衛隊隊員だからね。関わるために身体を今の内に鍛えといた訳ですよ。自衛隊に入ったら楽が出きるように。

まあ、それは無駄だったみたいですけどね。

そもそも酷くない？神様さあ

『主人公に会えると思ったら大間違いである！』

って言ってたよね。昨日の事が夢じゃなかったのだ。おそらく原作は始まっている。だって普通に暮らしてて異世界に召喚されるとか無いから。

しかも要望として事が起こるのは秋葉原って言ってるからね俺ってば。

ということは秋葉原から召喚された彼、平賀才人が多分主人公だろう。

平賀才人・・・ヒラガサイト・・・うん、知らん。ただまあ、きっと彼を中心に事が起きるだろう。注意しながら行動しよう。

さて、考え事をしてたが今何時だろうか？
部屋を見渡すも時計らしき物がない。
うーん、しょうがない。えっと、多分体内時間的には5時くらいだろう。そろそろ起きようか。
身体を起こしてベッドから起きようとすると手が何かに引っ張られる。確認すると俺の手をルイズが両手で包むように握って寝ていた。
・・・・おっふ！やだ可愛い！
頭を働かせ、考える。
目の前に美少女を起こしてはならないだろう。
しかしこんな可愛い美少女をどうする？
・・・答え、美少女堪能夢日記。
では早速、頭の香りから嗅がせて頂こう。
「・・・いただきます。」
「何が美少女堪能夢日記だ。」
声に反応して、そちらに目を向けると昨日一緒に異世界に来てしまった少年である平賀才人がいた。仁王立ちである。
「・・・あ、起きてたの？」
「昨日は寒くて眠りが浅かったみたいでな。エンジがぶつぶつと独り言を言ってたから聞いてみれば・・・何が『今この目の前の美少女をどうする？・・・答え、美少女堪能夢日記。』だよ。ただのセクハラしようってだけだろ！と思ってな。止めるために完全に起きたんだ。」
昨日のワラでは本当に眠りにくかったのだろう。かなり不機嫌で目も据わってらっしゃる。
「今すぐベッドから降りろ。そして大人しくしておけ。」
「り、了解。」
その後、お説教をされました。

「ふう。じゃあ俺はまだ寝るからな。大人しくしとけよ。」
「わかった。了解。あ～でも俺、外に少し出てくるわ。」

「は？まだ外は日が出てないぞ。」
「そうなんだけどさ。朝から走るのが日課なんだ。」
「そうかよ。あんま遠くに行くなよ。」
「はいはい。んじゃな～。」
「はいは一回だ！」なんて声を聞きながら俺は扉を開けて部屋の外に出た。

さて、とりあえず部屋の配置を覚えてから階段を降りて外に出る。すると何と気持ちの良いことか。空気が澄んでいるのが分かる。
これはちょっと興奮する。
俺は気分を高揚させたまま走り出した。
うわーナニコレー楽しいー!!身体が軽い！何処までも走れそうだ！
それから小一時間全力疾走し続けた。
いつもなら３０分の全力疾走で疲れるものの今日は倍も走れて嬉しかった。
しかし走り終わって気がついたのだが
・・・風呂は何処だ。
テンションに任せて行動すると禄なことがない。
汗だくな状態で、どうしたものかと考えていると後ろから声をかけられた。
「あの、大丈夫ですか？」
振り向くとそこにはメイド服を来た黒髪の美少女が立っていた。
「あの、お困りでしょうか？」
「あ～いや、はい。困ってます。風呂場ってないですか？」
「お風呂場ですか？お風呂場でしたら貴族様専用のがありますからご案内致します。」
「ありがとう。じゃあ、そこにって・・・貴族様専用？」
「はい。」
「あのごめん。俺って貴族様じゃないんだけど。」
「えっ?!失礼しました。お召し物が立派でしたのだ貴族様だとばか

り。」
あー修学旅行中だったからなぁ。ブレザーは部屋に置いて来たけど、ワイシャツ姿だからな。間違えるのも無理ないか。
「それですと困りました。お風呂場は平民には解放されておりませんので。」
「そうなんだ。えっと、君は普段どうしてるの？」
「はい。井戸の近くで衝立を立てて、お水で洗ってますよ。」
「そ、そうなんだ。じゃあ俺もそうするよ。申し訳ないんだけど、井戸に案内してくれるのとタオルを貸してくれない？」
「わかりました。では、こちらへ。タオルはお体を洗って頂いてる間に持ってきますね。」
「すまんね。ありがとう。」

ないわー。俺ないわー。何で気がつかないかなー。
「だ、大丈夫ですか？」
「うん。大丈夫。本当にありがとうね。」
「いえ、こちらこそ申し訳ありませんでした。」
何があったか説明しよう。
体を井戸の水で洗いながら汗を流す俺。
この間にタオルを持ってきてくれたメイドさん。
メイドさんは「服を洗いましょうか？」と聞いてくれたのでお願いしちゃった俺。
この場で洗濯（手洗い）を始めてくれたメイドさん。
その間にこの世界の常識を教えて頂きました。
貴族なんだ、平民なんだ、ここはトリステイン魔法学院だとかね。
洗い終わったようで、替わりのお召し物はどの部屋から持ってくればよろしいですか？と聞いてくれたメイドさん。
「・・・え？」ってなった俺。
「・・・え？」ってなったメイドさん。
現在、焚き火をして服を乾かし中。以上。

・・・・あれだね。外でタオルだけを巻いてる状態って興奮するね!!

「本当に申し訳ありませんでした。」
「いやいや、俺が悪いって。事情とか話してなかったもんな。」
「・・・あの、本当に使い魔さん、何ですか？」
「そだよ～。しかも異世界からね。」
「はあ、異世界ですか。何だかピンと来ませんね。」
「まあ、此処は向こうの田舎と変わらないけど、空気が段違いに綺麗でさ、思わず走っちゃたんだよね。」
「それであんな笑顔で走ってたんですか。」
「いや～見られてたか。お恥ずかしい。」
「ふふ、おかしな人ですね。」
「・・・笑顔が素敵だ。」
「そ、そんなことありませんよ。」
しまった。ポロっと本音が出てしまった。いや、でもこの子は人を惹き付ける何かがあるんだよな～。・・・あれ？まさかこの子がヒロインとか？
どうしよう。原作に支障をきたすかも・・・・まいっか。どっちにしても作品のストーリーを知らないからな。まあ要注意人物程度に認識しておこう。
「そういえば名前って言ってなかったよね。俺の名前は綱島エンジ。エンジって読んでくれ。」
「エンジさんですか。私は学院でメイドとして働かせて頂いております。シエスタと申します。何かあったら何でも言って下さいね。」
「そっか、ありがとう。早速聞きたいんだけどいい？」
「はい。何ですか？」
「主人であるルイズ様に朝の紅茶でも用意したいんだけど、食堂って何処かな？」
「食堂ですか。わかりました。こちらです。」

「ありがとう。序でに美味しい紅茶の入れ方を教えてくれない？」
「ふふ、わかりました。」
「ありがと、シエスタ。」

いや～良い子に会ったなぁ。やっぱ早起きは良いね～。それに異世界っつうか作品の世界は良いね。可愛い子ばっかり。
お盆に紅茶を載せて階段を登りきり、ルイズの部屋の前まで行くと中から二人の声がしている。どうやら二人は起きているようだ。
俺は意気揚々と部屋に入った。

「たっだいま～。ルイズ様～、朝の紅茶をお持ちしま・・・し・・・・た・・・・・」
驚愕である。部屋に入ったらどんな状況だったと思う？
「やっと帰ったかエンジ。お前遅いぞ！お前が来ないから俺が・・・ってどうした？」

部屋に入ると、パンツのみの半裸美少女にワイシャツを着せらているのか、はたまた脱がされているのか、とにかくアレな状況だった。

「おいコラ、サイトさんや。どんな状況だこれ？脱がしてんのか？ああおい？俺には説教したくせに脱がしてんのかコノヤローが。」
「ちょ?!ちげーし！着替えをさせてんだよ。さっきなんてパンツまで履かせろって言ってきてたんだぞ！冗談じゃねぇよ！」
「パン・・ツ・・・だ・・と？そんなの・・ご・・ほ・・・び・・・」
「え？」
「ご褒美じゃねえかコラーーーー!!!一発殴らせろーーーー!!!」
「な、なんでだーー!!??」
直ぐに机にお盆を載せて紅茶の安全を確保し、サイトに殴りかかる。
サイトは本気で危険だと感じたのか部屋の中とはいえマジ逃げし、

ルイズは、部屋の中で追いかける俺と追いかけられるサイトを見ながら紅茶を飲み始めた。
「はあ。騒がしい朝ねぇ。あ、紅茶美味しい。」
「一発だ！一発だけでいいからヤラせてくれ！」
「おい！そのセリフは字ずらにするとエライことになるからな!!」
こうして異世界生活二日目が始まったのだった。